
リトルバスターズ 雪山で遭難？そうなんです。

evol@Rewrite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズ 雪山で遭難？そうなんです。

【Nコード】

N3868U

【作者名】

evol@Rewrite

【あらすじ】

「・・・我等がリトルバスターズが、雪山で遭難しました。」

「・・・そうなんだ、お姉ちゃん。」

「美鳥。貴方の出番はありませんよ。」

「いやいやお姉ちゃん。それはどうかな？」

拉致と雪山と！？と全員シッコリ(前書き)

どうもこんにちは。

初めまして。evol@Rewriteです。

「どうも。アシスタントの西園美鳥です。」

おい、なんだお前は。

アシスタントなんてたのんでない。

それに、俺は美魚派だ(キリッ)。

「いやーじゃない。見た目は美魚と一緒になんだし。それとも、私じゃないヤ？」(絶妙の涙目上目遣い)

グハアッ！

ふふふ、いいだろう。

サイッコーだね！西園姉妹！

「・・・変態ですね。」

と、いうことで、お楽しみ下さいー！！

拉致と雪山と!?!と全員シッ!!!!

「なにこれえっ!?!?」

僕がめを覚ますと、そこには白銀の世界が広まっていた。

「なにこれ!?!?どうゆうことなの!?!?ねえ!?!?恭介!?!?恭介はどこ!?!?」

「落ち着けよ理樹、!?!?使いすぎだぜ?」

「これが落ち着いていられる!?!?なに!?!?なんで!?!?どうしてwhy!?!?」

「理樹。いい加減落ち着け。そう騒いでいたら、せつかくの雪山が台なしじゃないか。」

「なんでだよ!?!?なんで!?!?雪山why!?!?」

「・・・突然のことで頭がパンクしているようだな。少年。」

「来々谷さん?なんでここにいるの?雪山だよ?」

「なんだ少年。私は雪山には来てはいけないと言っのか?」

「私たちもいるよ」

ふとかけられた声の方へ顔を向けると、そこにはいつものメンバー

+ -1がいた。

「なんでみんなで雪山にいるの？」

「それはねえ、みんなで雪山合宿に来たからなのです。」

合宿？そんなこときいてない。

「やはー理樹君。今日も元気にツッコんでるね。」

「うるさいわよ、直枝。」

「リキ。しゃらっぷなですよ。」

「・・・ああなると、直枝さんは手をつけられませんから。」

「宮沢様の言う通りですわ！せっかくの雪山がだいなしではありませんこと？」

「まったく、リキは何をそんなにはしゃいでいるんだ（ソワソワ）」

「貴方もずいぶんソワソワしてるわよ？棗さん？」

「なにい、そうだったのか（）」

「なにいつて、貴方の事じゃない。」

「ああ、白銀に映える少女達。おねーさんたまらんよ（）、（ハアハア）」

「合宿？そんなこと一つも聞いてないよ？」

「そりゃそうだ。恭介のやつが寝てる理樹を勝手に連れ出したんだから。」

まったく、いつもいつも・・・

「・・・で、恭介はどこ？」

「恭介の奴なら、今頃一人で助けを呼びに行っているだろう。」

「え？たす・・・何て？」

「だから、恭介は一人で助けを呼びに行ったんだ。」

「助けて？なんで？」

「・・・そりゃあ俺達が遭難してるからだろ？」

「へへ、そうなんだあじゃねーよ！！なんで遭難！？なんで僕は勝手に連れてこられて遭難してるの！？」

「なんでって、俺達リトルバスターズはどこでもいっしょだよ？何言ってるんだ？今更。」

「そつゆづことじゃねーじゃねーじゃねー・・・」

「わふー、リキは一人ドブプラー効果がうまいのですっ」

「なんで！？遭難してるのにみんなそんな緊張感のかけらもないの！？？」

「・・・さつきから！？をいすぎです。井ノ原さんも言っていました。落ち着いて下さい。直枝さん。」

「りきは遭難してるとゆうのに緊張感のかけらもないやつだな。」

「てゆうかりトバスマンバーじゃない人もまじってるんだけど！？」

「ひどいわね直枝。私達はもうメンバーよ？エクスタシーよ？」

「な・に・が・だ・よ！！！！」

「とうとう理樹君がキレたわね。」

「まったく、直枝理樹ももう少し宮沢様のようになってくれれば）ポソポソ）」

「え？さーちゃん今なにか言った？」

「な、なんでもないですわっ／／／」

「恥じらう佐々美女史もなかなか（、）イイネ！」

「・・・それで？恭介はなんでこんなところに連れて来たの？」

外をみると、吹雪がだんだんと強くなっていってるのがわかる。

「知るかよ、俺達だって半ば強制的に連れてこられたんだぜ？」

相変わらずため息の出ることしか・・・

「なんで恭介は一人で行ったの？その方が危険じゃない。」

「知るか、奴はいきなり変な仮面をつけて、

『お前らを遭難させてしまったのには俺の親友に責任がある。だから、日頃の礼として、このくらいのことにはさせてくれ。うまう。』
とか言った後に

『はりやほれっ』

と言いながら外に出てった後、短い悲鳴がきこえたが理樹が起きたのでスルーした。」

「いやいやいや、そこはスルーしちゃダメだよ。」

「理樹君、その、いやいやいやって、好きね。」

「いやいや、まだ二回目だよ。」

・・・ン

「で、えーと、そうだ！」

「どしたんデスか？理樹君。」

・・・ドン

「いや、恭介を助けにいきつよ。」

・・・ンドン

「あのバカ兄貴のことはほっつておけ」

・・・ドンドン

「遠くに行つてたら探しようがないじゃない。バカね、直枝は、ほんつと、バカ。」

・・・ドンドンドンドン！

「いや、さっきの話しの通りだとすぐ近くにいると思つよ。」

・・・ドンドンドンドンドンドン！

「さっきからドンドン扉叩いてるし。」

ガチャ。(ドアが開く音)

『うるせー(この、バカ兄貴！)』(全員の怒り)

ドガッ(鈴が恭介にハイキックを決める音)

「グハアッ」(恭介の悲鳴)

ドサツ(恭介が雪の上に落ちた音)

ガチャ。(ドアを閉める音)

「……見なかったことにしよう、見られなかったことにしよう。」

「……そうですわね、神北さん。」

「ようしつ、これで万事オツケーですよ。」

『……』（全員の沈黙）

なにこれ、僕も流していいの？

そんなことを考えてると、

「って！いいわけあるかぁー！！！」

大きく開け放たれたドアから、雪まみれの恭介が飛び出してきた。

「うっさいわ！ボケー！」

ドガツバキツ（鈴が恭介に空中コンボを決めた音）

ドサツ（恭介がドアの外に落ちた音）

ガチャ！ガチャガチャ。

（ドアが閉められ鍵がかけられた音）

『……兄だぞ？』

（ドアの向こうから）

「知るか。ボケ。バカ。クズ。」

『うあああああああ！！！！』

「……どうするのさ、鈴。いままで遠くに行っちゃったじゃない。

」

「うみゆ、しかたない。」

「そうだな、ここは。」

『次回へ続く!』

「……かもしれせん。」

「えーーーー!?」

拉致と雪山と!?!と全員ツッコミ(後書き)

いかがでしたでしょうか？

まだまだいたらぬ点ばかりですが、楽しんでいただけたら幸いです。

「ま、つまんなかったら作者の中二病具合を笑ってやってね」

・・・おい、なんだその言い草は。

「だって、あなたほんつと中二病じゃない。」

ぐ・・・反論できない。

そ、それでは、読んでくださった方。

本当にありがとうございました。

「ありがとね〜ノシ」

もし次回が書けるとしたら

今回あまり書けなかった他キャラを頑張って書こうと思います。

それでは。

照れとからかいとバトルとセ○バーさん（前書き）

「ヤッホー 久しぶり？なのかな？」

いきなりフランクすぎるだろ・・・

「ダメダメ。こーゆーくらいやらないと。お客様はおもしろがってくれないよ?。」

いやいや、むしろ憐れまれてるよ・・・

『なにこの作者ww』

厨二すぎるww』

とか思われてるよ・・・

「そんなんじゃ、ダメ。だぞっ」

あはは・・・ありがとう美鳥。

「さあ、頑張って書こうよ!。」

うん！がんばるよ〜。

て、ことば、二話です。

どうぞ。

(ジャパニーズ土下座スタイルで)

照れとからかいとバトルとセ○バーさん

「で、どうするの？もう二話目になっちゃったよ？」

「そうあせるな、理樹。」

「そつだ少年。まだ時間はたっぷりあるぞ。」

「たっぷりって、早くしないと恭介死んじゃうよ？」

「いやだ！」

『！？』

「みんな会えないなんていやだ！

恭介がいないのだっていやだ！

バカ二人も、小穂ちゃんがないのだっていやだ！

みおもはるかも、クドもくるがやも、さささもさやも、かなたも、りきも……」

「みんないなきゃ、いやなんだっ！……」

「鈴……」

「へへ、言ってくれるじゃねーか。鈴。」

「そつだな、誰か一人欠けただけでそれはもう、リトルバスターズじゃない。」

「……そつですよね。恭介さん。」

「ああ、鈴君の言う通りだ。恭介氏。」

『・・・』

「つてえ！なんで『なんでお前がいるんじゃあー！！！』・・・」

「僕がツッコミ終わる前に鈴のハイキックが恭介を襲う。」

「よつと。」

しかし、それを軽々かわす恭介。

「ハッハッハ。鈴、お前もかわいいところあるじゃないか。」
「・・・」

「ハッハッハ、どうした？鈴？顔が真っ赤だぞ？」

からかう恭介に、鈴が襲い掛かる！

（バトル、スタート！！）

二人の武器がきまる。

鈴「・・・これ。」

鈴は木刀を手にする。

真人「恭介、これを使え!!」

真人が恭介に武器を投げ込む。

恭介「サンキュー。助かるぜ。」

しかし、手に握られていたのはうなぎパイだった。

恭介「なんでだぁー!!」

真人「いや、状況的に面白いと来々谷に言われて。」

唯湖「ハッハッハ。まあ、いいではないか。恭介氏。」

謙吾「当たらなければどうということはない。」

理樹「いや、避けるって、無理でしょ。」

小毬「鈴ちゃんがなんかいつぱいいるよ!？」

クド「わふー!これぞ、ジャパニーズぶんしんのじゅつなのですっ」

美魚「動きが早過ぎて残像が見えるだけですよ。」

葉留佳「いや、みおちん『だけ』って……」

佐々美「くっ、また腕を上げましたわね。棗鈴！」

紗耶「鈴ちゃんすごいわね・・・」

佳奈多「でも、これぐらいのハンデ、どうってことないでしょう？
棗先輩？」

にやけながら佳奈多が恭介に問いかける。

しかし、そこに恭介の姿は無かった。

そこには、恭介と同じ格好。しかし、マスクをかぶった何者か
がいた。

鈴？「キサマ、ダレダ？」

理樹「うわあ、鈴。言語能力まで戦闘力に回しちゃってるよ。」

真人「あれこそ、^{バースカー}狂戦士だ！！」

恭介？「親友のピンチに参上した。うまうま。」

鈴？「マアイイ。ハムカウモノハ、ツブスタケダ。」

クド「やつちゃうのです！バースカー鈴さん！！」
理樹「クド！？パクリはだめだよ！？」

棗兄妹？のバトルが始まる！！

鈴？の攻撃！！

木刀を軽く振るう。

ドガッ。

理樹が振り向くと、壁に切り傷が入っていた。

鈴？「・・・イクゾ。」

鈴？が恭介？との距離を一気に縮める。

鈴？「スト○イク・エア！！」

理樹「うわあああ！！それはヤバいつて！！」

恭介？「そんなものか。鈴。」

寸前で避けた恭介？の反撃！！

恭介？「ゲイ○ウ！！」

理樹「だから。ダメだつて！！マニアック過ぎるよ！！」

強烈なうなぎパイの一突きが鈴？を襲う！！

鈴？「グハアツ！！」

鈴？に300ダメージ！！

恭介？の攻撃！！

恭介？「我が財を喰らうがいい！ゲートオブビロン！！」
大量のうなぎパイがどこからか鈴？に襲い掛かる！

理樹「キャラ統一しろよ！！」

恭介？の攻撃に対して鈴？は叫ぶ！！

鈴？「ア○アロン！！」

恭介？の攻撃は防がれた！！

鈴？の反撃！！

鈴？「エクス○リバー！！」

恭介？「うぎゃあああ！！」

恭介？に500ダメージ！！

恭介？は倒れた！

鈴？の勝利！！

「クダラナイコトヲゆうからだ。バカ兄貴め。」

「あ、やっと戻った。」

「ふむ、なかなか熱いバトルだったぞ。」

「僕は別の意味で熱かったけどね・・・」

「あははっ、理樹くんのツッコミもおもしろかったですけどね。」

「直枝、あなたバトル漫画によく出てくる脇役みたいだったわよ。」

「『みたい』じゃなくて完全に完璧に全璧に脇役でしたよ？」

「西園さん、あなたもギリギリですわよ・・・」

「猫繋がりでよかれと思ったのですが・・・」

「ダメですわよ、気をぬいては。」

・・・るよ

「で、どうするのだ？理樹。」

・・・きるよ

「うーん。」

『あれ？なんだか視界がぼやけてきた・・・』

・・・くる。

あの忌ま忌ましい病気。

ナルコレプシーが。』

・・・起きるよ。理樹。

照れとからかいとバトルとセ〇バーさん（後書き）

いかがでしたか？

文才・・・なにそれ？

アハハハハッ

「じらじら、自虐しない。」

自分で『他のキャラを目立たせたいです』なんて言っというこのザマですよ・・・

と、ゆうか。実は遭難のお話はこれで終わってしまうんですよ。

「え？そうなの？こんなグダグダでいいの？」

下手くそなコメディ―小説を読んでくださった皆さん。

本当に・・・本当にありがとうございます。

それでは

「またね〜ノシ」

・・・え？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3868u/>

リトルバスターズ 雪山で遭難？そうなんです。

2011年7月4日20時44分発行